

特集

NICU・PICUで活躍する 臨床工学技士になろう



編集責任

神奈川県立こども医療センター 新生児科(非常勤)

松井 晃 MATSUI, Akira

「子は宝」という言葉がある。

少子高齢化が進み、人生100年時代と言われる現在の日本に活気があるだろうか。不安で暗い世の中に感じるのは、おそらく私だけではないだろう。

エネルギーに満ちた明るい世界とは、何かよくわからないがワクワクする世界だと思う。50年ほど前に私が通っていた小学校は、1クラス40人、1学年に8クラス×6学年=1920人、約2000人もの小学生が集まるマンモス校であった。あまりにも多いので、私の町にも小学校が新設されたが、それでも活気に満ち溢れていた。

多くの子どもたちが、放課後には自由に集まり自由に遊ぶ。こんな光景が当たり前であった。暗くなるまで帰ってこないと親を心配させるのが子どもの仕事であった。

ワクワクするエネルギーを溢れさせるのが子どもの仕事だと思う。だから、「子は宝」なのである。親にとっての宝、家族にとっての宝、社会にとっての宝。この宝から、我々はエネルギーを与えられ、忙しい毎日に追われながらも生きることができる。

少子化が進む昨今では、この「宝」の1つ1つの重さ、大切さが大きくなっている。

尊い命を守り、救うことが大人の役割だと思うかもしれない。しかし、役割ではなく尊い命のエネルギーがあるからこそ我々大人は生きて

いけるのだと思う。

500 gにも満たない命が発する生きるエネルギー。なぜ、この命は生き続け、成長をしようとし必死に心臓を動かし、呼吸をしているのか。

ここには何の説明も必要ない。魂をもった、生きようとする命があるだけである。

このエネルギーは、我々の想像を超えた何かを伝え、我々を支えてくれる。

そんな生きるエネルギーを与えてくれる子どもたちが闘っている場所が、新生児集中治療室(NICU)や小児集中治療室(PICU)である。

厳しい闘いに挑む子どもたちを、少しでもサポートしてみてもはどうだろう。我々にできることは、1%にも満たない小さなサポートかもしれない。しかし、子どもたちは我々に10倍、100倍、無限のエネルギーを返し、我々は幸せを感じられる。

チーム医療のなかに臨床工学技士がいなかったら、隙間だらけの医療になってしまう。小さな命がその落とし穴にはまることがないように、落とし穴を1つでも減らすことができる臨床工学技士がチーム医療には必要なのである。

我々を支えてくれる子どもたちに心から感謝しながら、病棟に足を運んでみようではないか。

(カンボジア国立母子保健センターNICU人材育成に向かう機内にてそんな想いを馳せながら本稿を記している。)